台大日本語文研究第 33 期
2017 年 6 月，頁 49-63
2017-03-30 收稿，2016-04-21 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.33.49

# 「竹」的「斎宮」與「月」之「皇女」
## —『大和物語』的『竹取物語』引用—

齋藤正志*

## 摘要

『源氏物語』第 17 巻「絵合」中敘述『竹取物語』為物語之始祖。因此，後繼作品的對此作之暗示引用也特別受到重視。但在『竹取物語』作品中，關於「竹」的話題，除了對老翁的稱呼外，在赫映姬的命名之後，只在老翁對車持皇子的詠歌中出現之後便斷絕，而作品後半的話題重點則轉移到「月」。

而在文學史上的後續作品中，『大和物語』第 36 段與第 77 段各有『竹取物語』的暗示引用表現。前者在「藤原兼輔」對「柔子内親王」的獻歌中以「竹」為主題，後者則是第 77 段對「孚子内親王」與「源嘉種」交情的描述以「月」為主題。就像之前所敘述的，『竹取物語』中「竹」為前半的重要要素，而「月」則是後半段的重要要素。

也就是說，『大和物語』藉由分離並暗示引用『竹取物語』的重要要素，而賦予二位内親王個別的獨特性。

關鍵詞:『竹取物語』、『大和物語』、「竹」、「月」、暗示引用力

臺灣大學學術期刊資料庫

* 中國文化大學日本語文學系副教授

# "Saigu(;a maiden in the service of a Ise shrine)" of "bamboo" and "Princess" of "the moon" - "The Tale of Taketori" allusion of "the Tales of Yamato"-

Masashi Saito *

## Abstract

"The Tale of Taketori" is described as an ancestor of a story in the chapter 17 of "Eawase" in "the Tale of Genji". Therefore the power of allusion to the following work has been emphasized in particular. By the way when princess's naming that excludes waka(;31-syllable Japanese poem) to "Kuramochi prince" by "Taketori no okina" except for old man(;Taketori no okina)'s name, a topic about "bamboo" has not ceased any more in whole work of "the Tale of Taketori", and a topic about "the moon" will be esteemed in the second half in the work.Now, there are "the Tales of Yamato" in a following work in a history of literature, but there is an expression which seems each "the Tale of Taketori" allusion in the chapter 36 and chapter 77. "Bamboo" is a theme in former present of "Fujiwara no Kanesuke" to "Juushi princess", but "the moon" is a theme by chapter 77 I tell about friendship of the other "fushi princess" and "Minamoto no Yoshitane". "Bamboo" is an important element in the first half in "the Tale of Taketoti" like above mention, and "the moon" will be an important element in the second half.In other words, "the Tales of Yamato" endow two princesses with each originality by separating and allusing an important element of "the Tale of Taketori".

Keyword: "the Tale of Taketori", "the Tales of Yamato", "bamboo", "moon" ,the power of allusion

臺灣大學學術期刊資料庫

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature , Private Chinese Culture University

# 「竹」の「斎宮」と「月」の「皇女」
## ―『大和物語』の『竹取物語』引用―

齋藤正志*

## 要旨

『竹取物語』は、『源氏物語』の第17巻「絵合」の中で、物語の祖先として叙述されている。したがって、その後続作品への暗示引用力は特に重視されてきた。ところで、『竹取物語』の作中において、「竹」に関する話題は、竹取の翁の呼称を除き、かぐや姫の命名以後は、翁による車持皇子への詠歌を除外すれば絶えてなくなってしまい、作中後半では「月」に関する話題が重要視されることになる。

さて、文学史における後続作品に『大和物語』があるが、その第36段と第77段に、それぞれ『竹取物語』の暗示引用と思われる表現がある。前者の「柔子内親王」への「藤原兼輔」の献歌では「竹」がテーマとなっているが、後者の「孚子内親王」と「源嘉種」の交情を語る77段では「月」がテーマとなっている。前述のように、『竹取物語』において「竹」は前半での重要な要素であり、「月」は後半での重要な要素となる。

つまり、『大和物語』は、『竹取物語』の重要な要素を分離して暗示引用することによって、二人の内親王に各々の独自性を賦与しているのである。

キーワード: 『竹取物語』、『大和物語』、「竹」、「月」、暗示引用力

* 中国文化大学日本語文学科准教授

臺灣大學學術期刊資料庫

# 「竹」の「斎宮」と「月」の「皇女」
## ―『大和物語』の『竹取物語』引用―

齋藤正志

### 一、はじめに

『竹取物語』は、『源氏物語』の第 17 巻「絵合」の中で、物語の祖先として叙述されている。したがって、その後続作品への明示／暗示の両用の引用力は特に重視されてきた。この場合の「引用力」とは、引用する側の力だけではなく、引用される側の力でもあり、この引用力はテクストとプレテクストとが相互に引き合う力を意味する。

例えば、明示的な引用力は、『竹取物語』と『伊勢物語』、この場合は第 16 段に発揮されている。そこでは紀有常が「これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ[1]」という和歌を詠み、「あま」に「天」と「尼」を掛けることで、出家して去る自らの妻、すなわち「尼」へ贈り物をしてくれた篤実な友人に対する返歌としている。この「あまの羽衣」が『竹取物語』の末尾で、かぐや姫に着せられた「天の羽衣」であることは明白であり、女性が去るという行動が共通することに相違ない。特に姫が詠んだ「今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける[2]」という和歌も当然、念頭にあり、それによって「天の羽衣」が天人の着用する衣服であり、友人の贈ってくれた衣服が「天の羽衣」のように美しいことを褒め称え、且つ「あはれ」という心情が見送られる妻から見送る夫と援助した友へ向けられていることがわかる。第 16 段の紀有常は自らの和歌の中に掛詞を用いて詠み込むことによって『竹取物語』を明示的に引用しているのである。

また、『竹取物語』と『源氏物語』では暗示的な引用力が発揮され

1 福井（1972：149）。
2 片桐（1972：106）。

臺灣大學學術期刊資料庫

ているが、特に宇治十帖において、宇治の八の宮の長女「大君」や次女「中の君」、そして外腹の娘「浮舟」に対して、『竹取物語』が様々に鏤められていることは小林正明（1986）や井野葉子（2011）などの先行研究に詳しい。

また、小嶋菜温子（1995）では三島由紀夫の『豊饒の海』において、『竹取物語』を「プレ・テクスト」、すなわち暗示引用された「前本文」として論じているほどである[3]。このように『竹取物語』の引用力は中古ばかりではなく、現代にまで及んでいるのである。

そこで本稿では、『伊勢物語』に後続する歌物語である『大和物語』と『竹取物語』の暗示引用力について述べることとしたい。具体的には、第 36 段と第 77 段を俎上に載せる。

## 二

さて、『大和物語』の第 36 段は次のような短章段である。

> 伊勢の国に、先の斎宮のおはしましける時に、堤の中納言、勅使にて下りたまひて、
>
> くれ竹のよよの都と聞くからに君は千歳の疑ひもなし
>
> 御返しは聞かず。かの斎宮のおはします所は、たけのみやことなむいひける[4]。

この「先の斎宮」とは、「（第 59 代の）宇多天皇第二皇女、母贈皇太后胤子・内大臣高藤公女、醍醐帝・敦慶・敦実親王とは同母兄弟（皇胤紹運録）。【略】斎宮記によれば在任三十四年[5]」の柔子内親王であり、「堤の中納言」とは「藤原高藤の兄の右中将利基の子息[6]」の藤原兼輔である。両者は従兄妹同士の関係にある。

また、「たけのみやこ」の「たけ」とは『倭名類聚抄』に拠れば「伊勢国多氣郡多氣（多介）[7]」を指すが、「みやこ」については、「宮」

3 小嶋（1995：240－258）。
4 高橋（1972：292－293）「大和物語」に基づき、漢字を当てるなど筆者が私的に施した。
5 阿部（1954，1974：285）。
6 阿部（1954，1974：311）。
7 中田（1978，1981：65）「巻六　伊勢国　第七十四」。

臺灣大學學術期刊資料庫

とする伝本[8]もあり、「都」と確定しがたい。比較的初期の注釈書である南波（1961）に拠れば、「ここは代々に栄える多気の宮どころと承りますにつけても、そのあるじの宮様が千年の長寿をお保ち遊ばすことは、なんの疑いもございません」と頭注で現代語訳され、さらに続けて「くれ竹の―節（ヨ）又は代の枕詞。竹は多気との懸詞。みやこは宮どころ・宮殿のある所。斎宮の居所は伊勢国多気郡にあった[9]」と施注されており、柿本（1981）に拠れば、「『神宮雑例集』（巻第一）に「斎宮寮　多気郡竹郷に(ママ)在り(ママ)、天長二年乙巳、勅使ヲ伊勢ノ国ニ差遣シ、勝地ヲ多気郡ニ撰定シ、始メテ斎宮寮院ヲ建ツ、時ニ氏子内親王群行ス[10]」ということで、斎宮寮が天長二年（西暦825年）に伊勢国多気郡竹郷に建設されたことが分かる。

この章段は、「先の斎宮」という作中の表現に即せば「斎宮」が退下した後に成立し、作中時間は斎宮在任中であって、伊勢神宮で奉仕しているのではなく、斎宮が自らの居所で休まれている時ということになる。柔子内親王と藤原兼輔は従兄妹同士ではあるが、親族関係だから勅使になるとは限らず、この場合は宮中から見舞いの使者として参上したのではないか、と考えられる。それは「君は千歳の疑ひもなし」と長寿の祝いを揚言しているからである。

同様の見解は、例えば、岡部（2014）において、

> 「くれたけ（呉竹）のよよ」は、代々受け継がれる生命の寿ぎ、場合によっては自らの死後に残る子女への祈りを込めた寿ぎに使われる言葉である。それを考えると、斎宮の住む多気が、京の貴族からは神秘的な異郷として受け取られていたことがわかる。『大和物語』当該段の兼輔の和歌も、異郷の力で斎宮の病

[8] 本多（1980：50）。内訳は「宮」が本多（1980）の底本である陽明文庫蔵本の他に慶長元和中刊古活字本（十一行本）、尊経閣蔵伝為家筆本、天理大学付属図書館蔵御巫氏旧蔵本、宮内庁書陵部蔵桂宮本、大東急記念文庫蔵本、久曽神昇氏蔵勝命本。一方、「宮こ／都」が東京教育大学蔵大永本、野坂元定氏蔵天福本、鈴鹿三七氏旧蔵本、群書類従本、小汀利得氏旧蔵伝為氏筆本、九州大学蔵細川家旧蔵本、大和物語抄本（承応二年刊）、大和物語幷首書本（明暦三年刊）、蓬左文庫蔵為衆筆本。

[9] 南波（1961：133）。ただし、漢字の旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。

[10] 柿本（1981：103）。

臺灣大學日語學系

を治し、栄えてほしいという願いを示していると考えることができる[11]。

と述べている。岡部（2014）が言及する「斎宮の病」については「この挿話は、柔子内親王が伊勢で病臥した際の出来事といわれる[12]」と述べられているのにもかかわらず、同論文中において、その出典は明らかにされていない。

ただし、先行注釈書に拠れば、

『紀略』（延喜十三年九月）に「二十七日丙寅、詔シテ中納言藤原定方等ヲ伊勢斎宮ニ遣シ、内親王ノ病悩ヲ労問セシム」、『貞信公記』（延喜十四年十一月）に「二「十七日己未、斎宮ノ病ニ依リ伊勢ニ奉幣スル事有リ」、『西宮記』（巻四、月次祭）に「延喜十六年六月十一日、左近ノ陣ヨリ伊勢ノ使ヲ発遣スル事」とあり、延長二年九月十六日に遷宮があった（「大日本史料」）とあるのも管窺に入る【略】斎宮は生来病弱であったのか。それとも右は一時の違和であったのか[13]。

という指摘があるので、おそらく注記の欠落であろう。「病悩」「病」といった表現が史料に明記されているので、柔子内親王は、やや虚弱体質だったのかもしれない、と推断できる。

この章段での兼輔の和歌「くれ竹のよよの都と聞くからに君は千歳の疑ひもなし」が『竹取物語』を暗示引用しているとすれば、それは車持皇子が蓬莱の玉の枝を持って凱旋帰国した、と虚偽の申告で竹取の翁のもとへやってきて、蓬莱山までの苦難の道のりを語った際に翁が嘆じた和歌になる。

くれたけのよよのたけとり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し[14]

片桐（1972）に拠れば、

「くれたけの」は、「よよ」の枕詞。「よ」は、竹の節と節の

[11] 岡部（2014：58）。
[12] 岡部（2014：56）。
[13] 柿本（1981：102－103）。
[14] 片桐（1972：66）。

臺灣大學學術期刊資料庫

の間の部分（倭名抄）。その「よ」を二つ重ねて、「よよ」といい、同時に「代々」の意味をあらわす。「長い年月」の意。「先祖代々」と説くのはどうか。この竹取の翁にかかわる生々世々をいっているのである。「ふし」は、竹の縁語。同時に、折節の「節」を表わす[15]。

ということである。また、大井田（2012）に拠れば、

「呉竹」は、淡竹の別称。中国原産で、清涼殿東庭のものが有名。「呉竹の」は、ここでは「節」の枕詞で、「節」と「代」が掛詞になる。「節」は竹の節と、事柄の意を掛ける。「よよ」には泣くさまを表す副詞も掛けられているか[16]。

と指摘されている。この大井田（2012）では「掛けられているか」というように明言を避け、懐疑的に施注されているが、人の泣く様子を「よよ」と表現することは『大和物語』第 41 段でも「たれもたれも、返しはせで、集まりてよよとなむ泣きける」とあり、これは大納言源清蔭と侍女たちが歓談に耽っていた際に、清蔭の和歌に対する返歌もできずに感動していた侍女たちの様子を語る表現で「よよとなむ泣きける」と使われており、また『古今和歌六帖』第四「恋」の「ざふの思」には、2175 番歌として「君によりよよよよよよとよよよよと音をのみぞ泣くよよよよよよと[17]」という和歌も入集しているほど、「よよ」という表現に涙は付き物と言い得るので、本稿では、竹取の翁が車持皇子による偽りの蓬莱山訪問話にすっかり騙されて「よよ」と泣く心境を詠じたと、大井田（2012）のように懐疑的に且つ消極的に疑義を挟みつつ述べるのではなく、もっと率直に且つ積極的に認めることにしたい。

## 三

ところで、『大和物語』には皇女が 6 人登場しており、特に孚子内

[15] 片桐（1972：66）頭注四。
[16] 大井田（2012：35）注三一。
[17] 「新編国歌大観」編集委員会（1984：223）。

臺灣大學學術期刊資料庫

親王という女性が「桂皇女」として7章段に亘り、異母兄の敦慶親王や第56代清和天皇の皇孫の源嘉種との浮名を流しているが、彼女は『後撰集』でも清和天皇皇子の貞数親王と交際が認められ、『元良親王御集』に拠れば第57代陽成天皇皇子の元良親王などとも交際していたことが分かっている[18]。

彼女もまた柔子内親王と同じく宇多天皇皇女であり、「桂の里に住んでいた確証」こそないが、『大和物語』で「亭子院に住んでおられた敦慶親王（七二段）が、孚子内親王の御殿にかよわれたり（四〇段）、亭子院以外の場所に母御息所が住んでいた（七六・七七段）こと」が叙述され、さらに「『伊勢集』詞書」に「宮をかつらといふ所におき」とあり、「宇多帝と伊勢との間に生まれた皇子を預け」たのが桂であって、「そこには宇多天皇も立ち寄られる（西本願寺本二五〇番歌）ことを考え合わせると、桂の里に孚子内親王に関係する邸宅が在ったと考えられ[略]桂は月を鑑賞するのに良い地であり、月と関係深[19]」いために、孚子内親王は「月」に纏わる皇女として物語の中で語られているのである。

特に、第77段において、

> これも同じ皇女に、同じ男、
>
> 長き夜をあかしの浦に焼く塩の煙は空に立ちや登らぬ
>
> かくて、忍びつつ逢ひたまひける程に、院に八月十五夜せられけれるに、「参りたまへ」とありければ、参りたまふに、院にては逢ふまじければ、「せめて今宵はな参りたまひそ」と留めけり。されど、召しなりければ、え留まらで急ぎ参りたまひければ、嘉種、
>
> 竹取がよよに泣きつつ留めけむ君は君にと今宵しもゆく[20]

と、孚子内親王と源嘉種との交情が語られているが、この中で、亭子院での観月宴に孚子が招かれ、それを阻止しようとした嘉種が自らを竹取の翁に、彼女をかぐや姫に譬えている。この章段でも、第

[18] 山崎（1979：109－121）。
[19] 山崎（1979：116）。
[20] 高橋（1972：319－320）「大和物語」に基づき、漢字を当てるなど筆者が私的に施した。

臺灣大學學術期刊資料庫

36 段と同様に竹取の翁の和歌「くれたけのよよのたけとり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し」が使われており、それは「よよに泣きつつ」という点に明白だが、それと同時に月の都へと召還される姫を慕いつつ「血の涙を流して惑」った翁に自らを擬す源嘉種が認められる。

一方、柔子内親王は、95 段や 120 段にも登場している。

> 同じ右のおほいどのの御息所、帝おはしまさずなりて後、式部卿の宮なむ住みたてまつりたまうけるを、いかがありけむ、おはしまさざりける頃、斎宮の御許より御文奉りたまへりけるに、御息所、宮のおはしまさぬことなど聞こえたまひて、奥に、
>
> 白山に降りにし雪の跡絶えて今はこしぢの人も通はず
>
> となむありける。御返りあれど、本になしとあり[21]。

95 段は藤原高藤の子息の三条右大臣定方の娘で醍醐天皇女御だった能子が帝の崩御後、一時的に天皇の弟宮だった敦実親王が彼女の許に通っていたのに、それが絶えた頃、柔子内親王から手紙が来た際に、能子が寂しい心境を詠み贈った、という話である。ただし、醍醐の死後なので、「斎宮」は 36 段と同じく「先の斎宮」であり、物語に拠れば、その返事があったのに記録されていない。

> おほきおとどは、大臣に成りたまひて年頃おはするに、枇杷の大臣は、え成りたまはであり渡りけるを、遂に大臣に成りたまひにける御慶びに、おほきおとど、梅を折りてかざしたまひて、
>
> おそくとく遂に咲きける梅の花たが植ゑおきし種にかあるらむ
>
> とありけり。その日のことどもを歌などに書きて、斎宮に奉りたまふとて、
>
> 三条の右の大殿の女御、やがてこれに書き付けたまひける、
>
> いかでかく年きりもせぬ種もがな荒れゆく庭の蔭と頼まむ
>
> とありけり。御返し、斎宮よりありけり。忘れにけり。

[21] 高橋（1972：332－333）「大和物語」に基づき、漢字を当てるなど筆者が私的に施した。

臺灣大學學術期刊資料庫

かくて願ひたまひける甲斐ありて、左の大臣の中納言渡り住みたまひければ、種みな広ごりたまひて、蔭多く成りにけり。さりける時に、斎宮より、

花盛り春は見に来む年きりもせずといふ種は生ひぬとか聞く[22]

120 段は藤原忠平が兄の仲平の大臣就任を祝って歌を贈り、その際の出来事を纏めて柔子内親王へ献上しようとした際に、その中に 95 段でも登場した三条右大臣藤原定方の娘で醍醐天皇女御の藤原能子が歌を書き付け、その返事が斎宮からあったのに、その返歌は語り手の記憶になく、この能子の許に忠平の子の実頼が中納言時代に通ったため一族は更に繁栄したので、その繁栄を寿ぐ和歌が先の斎宮から贈られた、という話である。

以上の 3 章段に登場した柔子内親王は、勅使として来訪した従兄に「長寿をことほぐ賀であるが、肉親から離れて遠国に住む心細さを慰め力づけ[23]」られたり、祖父を同じくする孫同士で父帝の女御でもあった能子を思い遣る手紙や歌を贈ったりしている。彼女は、その名に相応しい柔和な女性だったのであろう。前述のように第 36 段では「竹のよよ」と詠まれており、「たけのみや（こ）」という地名由来も語られ、ここに『竹取物語』の暗示引用を看取することは容易である。

それは孚子内親王においても言えることであるが、孚子が先行研究に拠れば「月の皇女」とでも呼びうるのに対して、柔子は言わば「竹の斎宮」である。

ところで、斎宮という人物については、先行作品に『伊勢物語』がある。前述のように『伊勢物語』には『竹取物語』が引用されていた。それでは『伊勢物語』のいわゆる「狩の使」章段、とりわけ第 69 段の引用を『大和物語』第 36 段に読み取ることは可能であろ

[22] 高橋（1972：356－357）「大和物語」に基づき、漢字を当てるなど筆者が私的に施した。
[23] 柿本（1981：103）。

臺灣大學學術期刊資料庫

うか。前者が「狩の使」であり、後者が「勅使」であること、前者の斎宮が第 55 代文徳天皇皇女で惟喬親王妹の恬子内親王であると設定されており、その狩の使となった男との一夜契りが語られていることは、果たして第 36 段に関わるであろうか？

この点について今井（1999）は、

> 『大和物語』の作者も、『兼輔集』の左注のように、伊勢下向といえば、業平の伝承を思い浮かべたに違いないが、しかし、それに類したスキャンダラスな方向に筆を進めず、斎宮柔子内親王に対する礼儀正しい賀歌献上をもって、謹厳、簡潔にこの一段をまとめていることに留意すべきであろう[24]。

と一蹴している。

なお、『後撰集』巻十三恋五の 944・945 番歌には、

> 忍びて通ひ侍りける人、今帰りてなど頼めおきて、公けの使ひに伊勢国に罷りて帰りまうできて、久しう問はず侍りければ　　少将内侍
>
> 人はかる心の隈はきたなくて清き渚をいかで過ぎけん
>
> 返し
>
> 兼輔朝臣
>
> たがために我が命を長浜の浦に宿りをしつつかはこし[25]

とあり、これが第 36 段の際か、とする説もあるが、『私家集大成』「兼輔 I　中納言兼輔集（書陵部蔵「歌仙集」511・2)」では 74・75 番歌として、

> いせの斎宮にまいりてかへるころ、はやうしりたる女のもとより
>
> 人はかる心のくまはきたなくて清きなきさにいかてゆきけん
>
> この女は斎宮のないしといふ也
>
> 返し
>
> たかためにわれはいのちをなかはまのうらにやとりをしつつか

[24] 今井（1999：128)。
[25] 『新編国歌大観』編集委員会（1983：52－53)。

臺灣大學學術期刊資料庫

はこし

となっており、やはり前掲の今井(1999)に批判されたものである[26]。

しかし、そもそも第36段には兼輔の後日談など語られておらず、したがって『兼輔集』を考え合わせる必要はなく、また柿本(1981)が述べているように「在任中の斎宮を訪う[27]」設定と考えられるので、「長奉送使」とする迫(1975)や今井(1999)[28]は支持できない。よって、第36段は『竹取物語』引用だけを認めるべきなのであって、『伊勢物語』第69段引用は認めないものとする。

## 四、おわりに

本稿の目的は、『竹取物語』と『大和物語』の暗示引用力を考えることにあった。

そもそも『竹取物語』は、竹の中から発見された「人」が成人して「なよ竹のかぐや姫」と命名されることによって始まっている。ところが、作中において、「竹」に関する話題は絶えて、難題求婚譚を経て、帝との応酬、そして月の都からの召還と展開していく。確かに姫を育てた翁は地の文でも「竹取」と呼ばれてはいるものの、竹取の翁の呼称を除き、かぐや姫の命名以後は、翁による車持皇子への詠歌を除外すれば、「竹」そのものは話題にならず物語は終焉してしまう。その代わりに姫は「月の都」に住んでいた天人だった、と展開し、竹から月へと話題が転換してしまうわけである。この点については、特に問題となってきたわけではない。

しかし、『竹取物語』が『大和物語』に暗示引用されるに当たって、

---

26 ちなみに『私家集大成』の「兼輔II　兼輔集（書陵部蔵501・145)」の31番歌も「おほやけの御つかひに、斎宮にまて返なんとて、ふるくしれりける女にといふはさいくのないしなり」とあり、同じ集の122・123番歌も「おほやけつかひにていせの斎宮にくたりて、ふるくしりたりける女にもいはさ」（二二）宮のうちなるへし（本ニ本ママ)」とある。

27 柿本（1981：102)。

28 迫（1975：5)「斎宮柔子内親王の群行〈伊勢下向〉は『日本紀略』によれば昌泰二年（八九九）のことである。そのころの兼輔は讃岐掾を兼ねる非蔵人か何かで、まだ身分は低かったが長奉送使の一員に加えられたのではなかろうか」と述べており、これを踏まえて今井（1999：127）は「兼輔は長奉送使として随行したらしい」と述べている。

臺南大學人文學報資料庫

「竹」は柔子内親王のエピソード（第 36 段）に、「月」は孚子内親王のエピソード（第 77 段）に、と、それぞれ分離して引用されることによって、それぞれの人物に独自性を与えている、と考えられる。

どちらも同じ宇多天皇の皇女でありながら、一方は斎宮であり、もう一方は皇女のままである。斎宮は遠隔地で神に奉仕する清浄な存在、いわば永遠の処女性を強調される人物であって、それが柔弱ながらしなやかで折れにくい性質を持つ「竹」に象徴される。

もう一方は皇子らとの浮名を流しつつ、皇孫の源嘉種にとってみれば、月の都に召還されるかぐや姫のように手の届きにくい存在である。この月の皇女には喪失の悲劇における女主人公としての姿を看取できよう。

このように永遠の処女たる「竹の斎宮」と喪失のヒロイン「月の皇女」という二者へと『竹取物語』のかぐや姫は分離して引用されているのである。それが竹に関わる前斎宮、柔子内親王であり、月に関わる桂皇女、孚子内親王であった。

**参考文献**

阿部俊子（1954,1974）「四、作中人物伝記資料」、『校本大和物語とその研究　増補版』、東京、三省堂。

雨海博洋編著（1983）『大和物語諸注集成』、東京、桜楓社。

雨海博洋・山崎正伸・鈴木佳與子（1979）『大和物語の人々』、笠間選書 116、東京、笠間書院。

井野葉子（2011）『源氏物語　宇治の言の葉』、東京、森話社。

今井源衛（1999）『大和物語評釈　上巻』、笠間注釈叢刊 27、東京、笠間書院。

大井田晴彦（2012）『竹取物語　現代語訳対照・索引付』、東京、笠間書院。

岡部明日香（2014）「六条院における秋好中宮の位相―その異郷性からの考察―」、『日本語日本文学』第 41 輯、新北市、輔仁大學外語

臺灣大學學術期刊資料庫

學院日本語文學系。
片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子（1972）校注・訳『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』、日本古典文学全集 8、東京、小学館。
小嶋菜温子（1995）「三島『豊饒の海』にみる転生と不死　『竹取物語』をプレ・テクストとして」、『かぐや姫幻想　皇権と禁忌』、東京、森話社。
小林正明（1986）「最後の浮舟―手習巻のテクスト相互連関性―」、物語研究会（編）、『物語研究―特集・語りそして引用』、東京、新時代社。
柿本奨（1981）『大和物語の注釈と研究』、東京、武蔵野書院。
「新編国歌大観」編集委員会（編 1983）『新編国歌大観第一巻勅撰集編　歌集』、東京、角川書店。
「新編国歌大観」編集委員会（編 1984）『新編国歌大観第二巻私撰集編　歌集』、東京、角川書店。
中田祝夫（1978,1981）『倭名類聚抄　元和三年古活字版二十巻本　附関係資料集』、勉誠社文庫 23、東京、勉誠社。
南波浩（1961）『大和物語』、日本古典全書、東京、朝日新聞社。
迫徹朗（1975）「『大和物語』の登場人物をめぐって」、中古文学会（編）、『中古文学』第 15 号、東京、中古文学会事務局。
本多伊平（1980）『大和物語本文の研究　対校篇　テキスト版』、東京、笠間書院。

臺灣大學學術期刊資料庫